（研究ノート）

現在的視点から見た黄遵憲の日本認識

――『日本雑事詩』の周辺――

宇野木　　洋

Ⅰ．はじめに

国際言語文化研究所の総合研究プロジェクト・Ｃグループは，「外国人の眼から見た日本」を共通課題に掲げ，とりあえず，明治期に来日した外国人が当時の日本を如何に理解したか，という問題群を跡づける作業を一つの柱に据えた。この作業は，中華人民共和国成立以降の文学・思想状況を研究対象としてきた私には荷が重く，当初は，どこから着手したらよいものかさえも考えつかなかったほどであった。だが，他領域の研究者との共同研究を通じて，現在こだわっているテーマである，文革後の中国における「西方［欧米のみならず日本等々も含む概念。なお，引用文における［ ］は宇野木のコメント。以下同じ］」の文学理論・思想の受容動向の検討という問題（その一端は参考文献＊N.で論じた）との接点――というより，問題構造の共通性らしきものに気づかされてきたようにも思う。本稿では，そうした視角から，明治初期に来日した黄遵憲（1848-1905年）の日本認識を手がかりにしつつ，私なりの問題意識を記してみたいと考える。とはいえ，もとより私の手に余る作業であり，黄遵憲をめぐる従来の研究成果の一端を紹介し，それをつまみ食いして，強引に自己の問題領域に引きずり込んで記した覚書といったレベルに留まるであろうことは，最初にお断わりするしかない。

Ⅱ．問題視角としての「中体西用」と「西体中用」

では，同時代中国における問題との構造の共通性（らしきもの）とは何か。若干抽象的になるが，最初に整理しておくことから始めたい。

例えば，文革後中国の哲学・思想研究領域で最も注目すべき理論的営為を展開していた李沢厚（89年の民主化運動を扇動した首謀者の一人とされたこともあって，「天安門事件」以降は，彼の論文を読むことができないのが痛ましい）は，独特の「西体中用」論を主張

したことで知られている。

> 中国社会と中国文化の活路をめぐる論争は，清末［清朝末期］から今日にいたるまで，すでに百年も続いてきた。「中体西用」と「全面西洋化」論とはあい対立する考えの代表的なもので，今なお影響力をもっている。清末に「中体西用」を主張した洋務派は，近代科学技術・工業だけを採用し，これらと分かちがたい西洋の価値観や政治，経済体制を排除しようとした。だが，これはついに成功しなかった。……「全面西洋化」を主張した胡適や呉稚暉らは，中国の既存の〈文化－心理〉の諸伝統を徹底して否定し，放棄しようとし，何から何まで西洋をまねようとした。しかし，これも呼応する人はわずかで，成果がなかった。……実際，中国の現代化の過程は経済，政治，文化における伝統の根本的な変革を要求しているとともに，伝統のなかで生命力のある合理的なものの保存をもやはり必要としている。後者がなければ，前者は成功しない。前者がなければ，後者は枷となってしまう。……この点をあえて中国と西洋というカテゴリーで考えるなら，「西体中用」といえるかもしれない。……これは現代化を「体」として，民族化を「用」とすることでもある。（＊M.「中国の智恵」）

即ち，李沢厚は，中国の過去100年間を貫く最大の文化（政治・経済面も含めた，いわゆる近代化へ向けた基盤を構築するための文化）的課題は，西洋文化・思想の受容をめぐる精神態度の問題であり，それは現在にまでつながる問題であると総括しているのである。その上で，従来までの議論を「中体西用」⟷「全盤西化［全面西洋化］」という構図で整理し，だがこの両者では結局のところ中国文化の再生は不可能であるとして，「西体中用」という方向を提起しているのだ。こうした李沢厚の主張をめぐっては，「新しくて合理的なものを吸収して本来の長所をより高めるように改造，転換していく」という姿勢から「転換的な創造」論とも呼ばれている点（＊M.「訳者あとがき」），また，「〈文化－心理〉構造」（深層意識レベルにまでしみわたった思惟パターン）や「『啓蒙と救国』パラダイム」（「五四」以降の中国では，危機的情勢と〈文化－心理〉構造によって，文化・個人本位の啓蒙の課題が政治・社会本位の救国の課題に圧倒されていったと見る）といった検討を要する独特の概念が絡み合っている点（＊M.「訳者あとがき」），更には，劉暁波（彼も「天安門事件」後に逮捕され，現在も消息が不明だ）を始めとする若手研究者からの強烈な批判（例えば＊K.）も提出されている点（＊O.に詳細な紹介がある），等々にも充分に留意して論じなければならないのだろうが，今は措く。

なお，若干補足しておけば，「中体西用」論とは，李沢厚も言及しているように，李鴻章・曽国藩等々のいわゆる洋務派の主張を総括する際に用いられる概念である。周知のように，洋務派は「中学［中国の学問・思想］ヲ体［基本・根底］トナシ洋学ヲ用［手段・方法］トナス」を指導理念として，外圧と内乱によって動揺していた清

朝権力を再建・強化するためには，「用」としての西洋近代技術の導入を図らなければならないと考え，まず何よりも軍事工場の建設と洋式軍隊の編成に着手したのだった。従って，中国全体の近代化を視野に入れたものでは毛頭なかった。それ故に，その後の改革運動の主体は，洋務派の限界を乗り越えようと意図して，議会制度を取り入れた政治体制改革（とはいえ光緒帝の力を借りた上からの政治改革，即ち立憲君主制の確立というレベルに留まるが）を主張した変法派（康有為・梁啓超等々），更には王朝体制自体の変革を目指した革命派（孫文等々）へと変化していったことによって辛亥革命を導いたのだというのが，従来の中国近代史における整理であり，李沢厚の議論も，抽象化されているとはいえ，基本的にはそれに依拠している。

ところで，中国近代思想史研究の溝口雄三氏は，こうした「洋務→変法→革命」という段階的発展論では問題が歪小化されるのではないか，という指摘を行なって話題を呼んだ。洋務運動（「派」という言葉は実態にそぐわないと言う）とは，「中華文明世界がヨーロッパ文明世界との対決を迫られ，自己の世界の敗北の危機意識から，異文明を摂取しつつそれによって自己の世界の再生と保存を図ろうとした運動」「政治，経済，社会，文化のすべてにわたった文明レベルの運動」として捉えるべきであり，だとすれば「林則徐から李鴻章，孫文，毛沢東をへて，文革後の現在もなおつづいているもの」と見なすべきであることを主張し，かつこれにともない，「一般に非常にせまい意味に限定」されている「中体西用」概念をも見直そうと試みているのである。そして，中国独自の歴史的実態とその展開（ただし時間的には，極めてゆっくりとした変化であるという）があり，従って「中国の近代は前近代との関連からとらえられるべきだ」という「中国基体論」を提出した（以上は全て＊L.に基づく）。

だが，こうした溝口氏の視点と李沢厚が提出した枠組とは，次元と思考のベクトルに差異があるにせよ，問題の所在をめぐっては，重なる部分がかなり大きいといえるのではないだろうか。即ち，中国独自の伝統文化・思想というものを基盤にすえて議論構築しており，その重みを踏まえた上で，西洋文化・思想との対抗の問題を検討し，まさに清末から同時代中国までを貫く問題状況を提示しているのである。

こうした日中の思想史研究が直面している，ないしは切り拓きつつある問題視角から見た場合，黄遵憲は独特の検討対象になるように思われる。清末の知識人の中で，伝統文化と西洋文化の対峙という問題を，皮膚感覚を通して最初に鮮明に意識した人間の一人であり，いわゆる洋務派的志向から出発したようだが，後に変法派の改革運動に強い支持を示して種々の実践も展開し，更には革命派的志向にも一定の理解を示すようになる。しかも，そうした背景には，日本というファクターが存在しているの

である。というより，日本を通じて西洋を意識したと言うべきかもしれない（ただし，「通じて」の意味内容が多元的な点には留意したい）。具体的には，外交官として日本に滞在した際の経験・思考というものが大きく影響したのだが，それは，「ほぼ一貫して日本を東方の野蛮国と見なしてきた中国が，伝統的な偏見を捨てて，外国としての日本を知ろうと努力したのは，初代駐日公使の何如璋および参事官の黄遵憲が最初であった」（＊J.）といわれるような姿勢に裏打ちされていたからであったと言えるだろう。以下では，こうした黄遵憲の日本認識とその展開を，『日本雑事詩』を手がかりに考えてみたい。

Ⅲ．黄遵憲と『日本雑事詩』の成立

黄遵憲は，詩人であり歴史家，そして外交官・改革運動家としても活躍した。そして，その全ての面で「愛国者」と呼び得るという（＊E.「解説」）。もちろん，「愛国者」であることと，日本に対する親近感や西洋への畏敬の念を抱くこととは矛盾しないのは断わるまでもない。

以下に，黄遵憲の略歴を記しておく（＊A.「解説」・＊B.・＊E.「解説」等々に拠る）。

字は公度。1848年，広東省嘉応州（現在の梅県）の名家に生まれる。76年，北京で郷試（科挙のうち第一段階の試験）に及第。77年12月（明治10年＝西南戦争直後），初代駐日公使・何如璋（黄遵憲の父の友人）の「参賛官［参事官］」として来日。78年秋より『日本雑事詩』を起稿し，79年春に完成（同年冬に出版＝「原刊本」）。82年，サンフランシスコ総領事に就任。85年，帰国。『日本国志』の著述に専念し，87年，『日本国志』全40巻を脱稿する（90年出版）。90年，イギリス総領事，次いでシンガポール総領事を歴任し，94年に帰国。イギリス滞在中に，『日本雑事詩』を増補・改訂する（98年出版＝「定本」）。95年，上海で強学会（変法派の団体）に参加し康有為と親交を結ぶ。甲午戦争（日清戦争）の敗北から危機感を抱き，96年，自ら1000元の援助を行なって，変法運動のための雑誌『時務報』を創刊。主筆として梁啓超を招く。97年，湖南省按察使（司法・治安担当）代理となり政治改革を推進。また譚嗣同（変法派の思想家だが革命派との架橋の役割を果たしたと言われる）等々とともに，時務学堂（教頭・梁啓超）を創設。変法的改良主義の枠を超えた，排満革命的な教育も推進する。98年6月11日，光緒帝は頤和園に康有為・張元済・黄遵憲・譚嗣同・梁啓超の5人を招いて変法維新の方法を尋ねようとしたが，黄遵憲のみは上海で病気療養中だったため欠席する。変法維新（新政）がなされた後，駐日公使に任ぜられたが，9月，戊戌の政変（西太后・袁世凱を中心とするクーデター）に遭い，赴任を断わって故郷に帰り，以後，再び政界には出

なかった。梁啓超が亡命先の日本で出していた雑誌『新民叢報』に時々文章を発表する。1905年２月23日，58歳で永眠。なお，墓誌名は梁啓超が作っている。

幾つか補足しておけば，外交官としての黄遵憲は，琉球「併合」(79年）を始め，朝鮮政策や蘇州への租界設置の動きといった，日本の強引な対アジア政策に対して，常に毅然とした反対の態度を示し続けたことで知られている。これは，サンフランシスコ総領事在任中にアメリカの華僑・中国人労働者排斥の動向に対して反抗し，精力的に保護活動を展開したこと，イギリス・シンガポール滞在中もイギリス政府と強談判を行ない，華僑の利益保護に尽力したことにもつながる，黄遵憲の剛直な「愛国者」としての側面であろう。だが，こうした日本に迎合しない態度をとり続ける一方で，中国の知識人として，一種の文化使節の役割も果たしていた点にも留意しておく必要がある。伊藤博文・榎本武揚・大山巌といった政治家との交流もあったようだが，親交が最も深かったのは，日本の漢学者・文人との交わりであった。日本人との意見交換は，漢文による筆談が主であったが，「当時の『詩社』（つまりは一種の『文壇』）において，清国人の作家が日本人の作家と全く区別されず（むしろ若干の尊敬をもって）いわば同じ『教養』を共有する同時代の詩人という形で抵抗なく受けいれられていた」(＊G.）という事実も存在していたのである。明治期の日中文化交流の一側面として，注目に値しよう。

では，詩人としての黄遵憲の位置は如何なるものか。10歳で詩を作ることを学んだといわれる黄遵憲は，文学史的にいえば，いわゆる詩界革命の実作上の先駆者と呼ばれている。詩界革命とは甲午戦争後の旧詩改革運動であり，主導者である康有為・梁啓超・譚嗣同・夏曽佑・黄遵憲等々は，旧詩の形式の中に新しい表現・思想を盛り込むべきだと主張した。もちろん，旧詩内部の改革に過ぎなかったという限界は存在するが，後の五四文学革命につながる言文一致（白話［口語］運動）の主張の萌芽的運動としての側面を備えており，一定の評価を受けている。黄遵憲が21歳の時に書いたという「雑感（其二)」は，後に胡適が白話文学運動の先駆と激賞しており，特に「我手写我口［話すように書く]」の一句は文学革命の際にスローガンの１つともなっているので，その一部分を紹介しておく（読み下しは＊A.に従う)。

我手写我口	我が手もて我が口を写さば
古豈能拘牽	古も豈に能く拘牽せんや
即今流俗語	即今の流俗の語もて
我若登簡編	我れ若し簡編に登せば
五千年後人	五千年の後の人

驚為古爛斑　　驚いて古爛斑となさん

詩人としての黄遵憲を有名にしたのは，詩集『日本雑事詩』であった。日本の現状と歴史に関する小項目を選び，それに七言絶句1首と解説文を加えたものである。手軽に日本を知るためのハンド・ブックのような役割も果たしたというが，その内容は，我々日本人にとっても興味深い指摘が多い。では，まず『日本雑事詩』の成立過程について，若干の説明を加えておく（＊E.「解説」に詳細な紹介・版本対照がある。以下，それに基づく）。来日2年目（78年＝明治11年）の秋に起稿し翌年春に完成したものが，一般に「原刊本」と呼ばれ，154首（即ち154項目）が収録されている。その後も幾つかの刊本があったが，90年，ロンドン滞在中に，「原刊本」から8首を削除して新たに54首を加え，また全体的にかなりの改作を施して「定本」（200首）としたのである。なお，黄遵憲は，膨大な量の本格的な学術研究書『日本国志』も執筆しているが，これとの関係でいえば，時間的経緯は，『日本雑事詩』（「原刊本」）→『日本国志』→『日本雑事詩』（「定本」）となり，「原刊本」は『日本国志』を執筆するためのスケッチとしての性格を備えていたと見てよいだろう。しかし，後述するように，『日本国志』を執筆する過程において――更には「原刊本」執筆過程においてもすでにそうだったのだろうが――対日観を大幅に変化させ，「定本」を成立させるに至ったのだ。そして，その背景には，サンフランシスコ滞在といった，直接的西洋体験・認識が存在したことは断わるまでもない。

『日本雑事詩』に収録されている項目には，神代以来の日本の歴史（例えば「三種の神器」「廃藩置県」「豊臣秀吉」等々。なお，項目名＝詩の題名，詩の読み下し，解説文の翻訳は，＊D.の原文を参照しつつ基本的に＊E.の訳に基づく。原題・原文は必要に応じて[ ]で補うことにする。以下同じ）・地理（「薩摩と水戸」「樺太」「芝東照宮」等々）から，当時の学校・警察・病院といった近代的諸制度（「女子師範学校」「法律」「議員」「税金」等々），更には物産（「七宝焼」「西陣織」「海産物」等々）・行事（「新年」「正月の遊び」「墓参」等々）・風俗（「嫁入道具」「地獄女」「女義太夫」「はきもの」「ひげ」等々）までもが含まれていて，その範囲の広大さ・網羅性には驚かされるしかないところがある。機会があれば，是非とも一読いただきたいとお願いしておく。

Ⅳ.『日本雑事詩』に見られる日本認識

『日本雑事詩』に見られる黄遵憲の日本認識の基本は，まず第1に，例えば，「思うに，両大国は，ともにアジアにあり，同類同文であって，輔車の相倚るがようでな

ければならない」(『日本雑事詩』，第10首「日中修交」解説文）という言葉に象徴的に示される。即ち，日本を「同類同文［原文通り］」の「大国［大同］」と見なし，互いに助け合っていくことの必要性を訴えているのだ。「同類同文」については後に触れるが，「大国」という認識は，中華思想に基づく小国日本という意識が普遍的であった当時の中国知識人の間にあっては，まさに画期的な視点であったことは，何度確認しておいてもしすぎとは言えまい。

では，何故，日本を「大国」と呼ぶに至ったのか。ここに黄遵憲の日本認識の第2の特徴が看取できる。即ち，西洋化ないし近代化へ向けた急激な展開を成し遂げつつあることに対する，一種の驚きと畏敬の念が存在するのだ。もちろん前述したように，『日本雑事詩』の「原刊本」を執筆している当時は，日本の西洋化に対し，疑問の念を残している側面も存在していた。例えば，「徳川氏が儒学をあがめてから，読書して大義を明らかにしたものは，武門が政権を専にするの非を，はじめて知った。……尊皇攘夷の論が起こると，たちまち四方これに和した。……死刑になったものも数知らずいたが，結局，成功した。これというのも，まことに漢学の力によるものである。このように，国に尽くした漢文を，国に背いて廃しようとするのであるか！」(第73首「勤王家」解説文）とも述べていたのである。もちろん，これは，当時，交際のあった漢学者たちの，西洋の学問に対する否定的見解に影響された側面も強いのだが，この文章を読む限り，かなりの憤りすら見て取れる。だが，『日本国志』を書き上げる過程で，また西洋を実際に見聞する中で，対日観を大きく変化させていったのも，前述した通りである。明治維新による諸政策・諸制度を積極的に肯定し，「中国の制度とヨーロッパの制度をたくみに斟酌折衷して［中国の制度とも言っているが，具体的に挙げているのは太政官といった位階の復活のみであり，実際は，ヨーロッパの方に重点があるのは明らかだ］，立派にととのった」(第31首「諸官庁」解説文）状況を作り上げていると賛美するに至るのである。明治維新以来「立派な政治が数えきれないほどであり……服制を変えたり，建物を造ったりして，諸政はまばゆいばかりに一新した」(第12首「文明開花［鋭意学西法］」解説文）と述べており，上垣外憲一氏の表現を借りれば，「ほとんど手放しでほめ上げている。軍事，経済については異論なく肯定，議会や法律については多少，表現が消極的であるようである。彼が無条件で善しとしているのは，カリキュラムの整然と組まれ，易から難へと段階的な教育の行なわれるように配慮の行きとどいた新式学校である」(＊I.）といった認識を示したのだった。

こうした対日観の変化の経緯は，「定本」の「序」に詳しく説明されている。

私の閲歴が次第に深くなり，見聞が次第に広くなって，変化を窮め，永久に通ずる道理というものを詳らかに知るようになって，初めて西洋の法に従って，故きを改め新しきを取り入れたればこそ，日本は卓然として独立することができたのである，と信ずるようになった。……しばらくしてアメリカに行き，ヨーロッパ人を見ると，その政治学術は，つまるところ日本と大した相違はない。今年，日本では，もはや議院を開設してしまった。進歩の速いことは，古今万国未曾有である。アメリカの大官や学者とあい，日本の話になると，彼らは全く，一も二もなく日本に感服している。……ああ！　我が国の知識人は，見聞が狭く，外国のことについては，これまで少しも注意しなかった。今は見たり聞いたりしているが，やはりまだ，古いしきたりをよいことだと思い，自己満足している。長い年月，半信半疑ですごし，深く広く考えて，やっと是非得失，長短取捨の要点がわかる。私は，そんなことでは，たいへん恥ずかしいと思う。

こうした中国の当時の知識人たちの見聞の狭さ，外国に対する無知，旧弊への自己満足，等々を憂いて，これでは中国の危機を突破できないと考え，「故きを改め新しきを取り入れた」日本に学びながら西洋近代を受容しようという姿勢を示しているところが，黄遵憲の日本認識の第３の特徴と呼べるのではないか。即ち，中国・日本の比較を通じて，中国の改革の道を追求していきたいとする方向性が濃厚なのだ。この点は，変法運動への接近の背景としても重視しておく必要があるだろう。ただし，伊藤虎丸氏が「西洋にあるものはすべて日本に見られる。西洋の近代を学ぶには，漢字を共有する日本を通じて学ぶのが便宜，とする態度」（＊G.）を黄遵憲の姿勢の一つとしてピック・アップしているように，この「日本に学ぶ」は手段であって目的は「西洋近代に学ぶ」であるという側面も存在している点は，忘れるわけにはいかない。もちろん，日本を通じたからからこそ見えてくる問題，逆に見えなくなる問題も存在していた点には留意すべきだろう。なお，こうした「便宜」的に日本を媒介にして西洋近代を受容するという態度は，その後の中日交流史を底流しているところがあり，それは，現在の日本における大量の中国人留学生の存在という状況（そこにおける問題点も含めて）にもつながってきていて興味深い。

黄遵憲の日本認識の第４の特徴点は，「同類同文」であるとの認識からくる，一種の親近感が生み出している問題である。この親近感は，当時の日本人の服飾から化粧に至る風俗の中に，清朝支配以前（更には，同じく異民族王朝である元の支配以前を例に挙げている部分もある）の古代中国の習俗の継承を見出し，その源流を中国古典の記述に典拠を求めて解説している，といったところに象徴的に示される。例えば，第145首「すわる［席地坐］」の解説文は長大だが，それは，「両膝は地につけ，腰を伸ばし，端座し，足で尻の下を支える。……これはいずれも中国の古礼の法である」というこ

とを説明するために，『漢書・賈誼伝』から始まって宋の『丁晉公談録』に至るまでの考証を延々と行なっているからであった。そして「密かに思うに，胡床［椅子の一種］はもと西方の風俗であったろう。趙の武霊王が初めてこれを学んだが，元が中国に入った際，その古い風俗を改めなかったので，広く（中国で）行なわれるようになったのである。日本の制度は，大部分，唐にならっている。唐の頃は，やはり地に席してすわっていた。だから日本では椅子がなかったのである。しかし，この十年このかたは，用いられるようになった」という一文で終えているのである。日本に対する親近感が，文化・伝統上の同一性に由来していることが看取できるように思われる。そして，この点もまた，その後の中日交流史を底流している一つの態度であることも断わるまでもない。

だが，裏返せば，こうした視点は，中国の伝統文化というものを原点にしながら，日本を見ていこうとする姿勢の顕現と言えるのではないだろうか。明治維新後の日本の中で，「変わったもの」と「変わらないもの」を区分し，「変わらないもの」の起源を中国の伝統文化に見出そうとしているのである。そして，そうした日本を媒介として西洋近代を受け止めようとしているのだとすれば，黄遵憲の姿勢は，極めて複雑かつ興味深い問題を提出していると言わなければならない。

V．おわりに

私としては，例えば，「黄遵憲の態度は，彼が基本的にはなお洋務派の立場に立っていたことを示している。つまり，彼における西洋近代は，制度に止まり，文学にまでは及んでいない。その意味で，これは近代文学交流史にとってはなお『前史』の段階に止まる」（＊G.）といった評価に対して，とりたてて異論を唱えるつもりは毛頭ない。もちろん，ここで言う「洋務派」の意味する内容が，いわゆる政治的立場としてのそれとは異なる（すでに見てきたように，黄遵憲はいわゆる変法派に属し，かつ晩年には革命派にも一定の理解を示すといった位置にある），幅広い概念として提起されている点を踏まえた上でのことであるが。しかし，黄遵憲の思想的基盤が「中体西用」論であり，彼の精神態度がその後の課題との関連で考えれば「前史」に位置づけられるにせよ，「文明レベルの運動」としての洋務運動という視角から考えた場合，貴重な出発点を提示していることもまた明らかなのではないだろうか。その後に引き継がれるべき課題を，ある意味で一挙に提出しているように思われるのだ。

それは，「中体西用」という際の，「中体」そして「西用」の内実を丁寧に跡づけることの重要性とも重なってこよう。例えば，溝口氏は，従来，マイナスのイメージで

語られてきた当時の「封建」という言葉の中にプラス的要素を見出すことを通じて，研究状況パラダイムの転換を図ろうとしているが，その際に，黄遵憲の言葉を一つの材料として取り上げていた（＊L）。黄遵憲が，湖南省按察使代理の時に省の知識青年に対して行なった演説がそれである。中央から派遣された官吏でありながら，彼はこう述べていた。

> 諸君よ，回避［県知事を任命するにあたって，極力出身地から離れた県に赴任させる制度］，不久任［県知事はおおよそ3年単位で免じていく制度］の枠に縛られている他省からの赴任官などは，本省の諸君にとって来遊の客か宴会での見知らぬ客人のみたいなもので，到底あてにはできない，諸君に求めたいのは自らその身元の郷を治めることだ，自治が充実すれば，郡県専政の弊を去って「封建世家の利」が得られ，これを一府一県から省へ，一省から天下に及ぼしていくことにより「共和の郅治」が実現できるのだ。
>
> （「黄公度廉訪第一次暨第二次講義」。＊L.より再引用）

溝口氏は，ここに「地方自治」運動の観念を見ようとしている。もちろん，康有為等々の言論も引用して，こうした主張が黄遵憲一人のものでなかったことを示しているし，また，後に何故マイナス・イメージに転化したかについても，詳細に論じていることも断わるまでもない。問題は，中国の現実に即して内在的に検討した場合，「封建」の中にも近代的な要素が看取できるのであるから，「一般に近代化の過程とは何であるのかを定義する必要があろう。……アジアにおいて近代は，自生的な近代と，外来的な近代と，二つの側面からとらえられるべきではないか」（＊L.）という視角から見るならば，黄遵憲は無意識的にせよ，「自生的な近代」にも着目していたと考えられる点にある。だとすれば，彼の「中体」の内実（伝統文化・思想の次元も含む）や，西洋の何を「用」と考えたのか，といった問題について，更に検討していく必要があろう。それは，彼の西洋近代（「外来的な近代」）認識，更には日本認識の問題とも直結してくるに違いない。そしてその際には，おそらく「西体中用」という概念装置（李沢厚の用法とはズレが生じようが）からの逆照射も役立つように思うのだが，どうだろうか。

くだくだと書き記してきたが，やはり冒頭にお断わりしたような問題意識と課題の列挙に留まる覚書に終わってしまった。今後，共同研究を通じて，少しでも肉付けをしていけたらと考えているということで，御海容をお願いしたい。

参考文献　（配列は，＊D.を除き各項目別の刊行順）

＊黄遵憲に関して

A．島田久美子注『黄遵憲』（中国詩人選集二集，岩波書店，63年）

B．伊藤虎丸「黄遵憲」（丸山・伊藤・新村編『中国現代文学事典』東京堂出版，85年）

C．徐永端『黄遵憲』（中国古典文学基本知識叢書，上海古籍出版社，89年）

＊『日本雑事詩』を始めとする日本との関わりをめぐって

D．鍾叔河主編『羅森：日本日記／何如璋等：甲午以前日本游記五種／王韜：扶桑游記／黄遵憲：日本雑事詩［広注］』（走向世界叢書，岳麓書社，85年。この『日本雑事詩』には，『日本国志』の関連部分が注記されており，また解説として鍾叔河「黄遵憲及其日本研究」も収録されている）

E．実藤恵秀・豊田穣訳『日本雑事詩』（平凡社・東洋文庫，68年）

F．河原・藤井編『日中関係史の基礎知識』（有斐閣，74年）

G．伊藤虎丸「近代文学における中国と日本 ── 序説に代えて ──」（伊藤・祖父江・丸山編『近代文学における中国と日本』汲古書院，86年，所収）

H．佐藤保「黄遵憲と日本」（G.と同じ）

I．上垣外憲一「黄遵憲『日本雑事詩』」（佐伯・芳賀編『外国人による日本論の名著』中公新書，87年，所収）

J．筧文生「中国人の日本観」（筧・飛田編『国際化と異文化理解』法律文化社，90年，所収）

＊その他

K．劉暁波『選択的批判 ── 与李沢厚対話』（上海人民出版社，88年。ただし「内部発行」。資料提供いただいた東京女子大助教授・代田智明氏に感謝したい）

L．溝口雄三『方法としての中国』（東京大学出版会，89年）

M．李沢厚（坂元・佐藤・砂山編訳）『中国の文化心理構造』（平凡社，89年。李沢厚の5論文を翻訳したもの。原文は80年代中頃までに発表されている）

N．宇野木洋「異文化受容形態としての〈転向〉と〈回心〉 ── 同時代中国における“西方”文学理論受容の一側面 ──」（J.と同じ）

O．加々美光行『現代中国の黎明 ── 天安門事件と新しい知性の台頭』（学陽書房，90年）